

令和4年5月22日

南の風 447

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

今回は『チームづくりの考え方』から、選手の「意欲」について考えてみます。

中学生、高校生を対象に話を進めます。

コーチから信頼が厚い選手は試合に出られますから、心身ともに充実して日々の練習に取り組み、自然にモチベーションを保てます。しかし信頼度の低い選手はあまり試合に出られません。そういう選手はチームの中に自分の役割を感じられず、チームの中に居場所がないと感じたり、チームに貢献したいとは思えなくなったり、ネガティブな存在になってしまいます。こういった選手を生み出さないように、チームの全員を掌握し、真の意味でチームをマネジメントしていくためには、光のあたらない選手に光をあてることができなければなりません。そしてそれは、指導者の仕事なのです。

中学生、高校生は心身ともに未熟です。自分が必要とされていると感じなければ、他の選手と同じ目的へ向かい続けるのは難しくなります。そんなとき何か問題を起こすのは陽の当たらない選手であることが多いものです。問題を起こさないまでも、自分は目をかけられていないという不信感は、チーム内の他の選手に影響を与えます。

モチベーションが下がっている選手に対して、コーチがちょっとした目配りをするだけで無用のトラブルを防げます。確かに悪いのは問題を起こす選手本人であるのかもしれませんが。しかし指導者が、光のあたらない選手に対して光をあてることができれば、起こらない問題もたくさんあると思います。

意識的にコーチから声をかけるだけで十分なこともあります。しかし、部員が増えれば全員平等に声をかけるのは難しいでしょう。

そこで一番目立たない選手を最優先します。一番日陰にいる選手に特に目を配るようにします。そういう選手が何か小さなことでもチームに貢献したときには、大げさと思えるほど褒めるのはとても効果的です。試合では貢献できないと感じている選手に自分も評価されている、チームに貢献できていると思ってもらえれば、チームの雰囲気は良くなるものなのです。そして、チームメンバーの多くが「自分たちも見てもらえているかも」という気持ちになります。それが、チーム全体の『意欲』に影響するのです。

そうやって、チーム全体に影響を与えていくことで、チーム内の力学はポジティブなものになっていくことが多々あります。

ここで、意欲に関して、ジョン・ウッデン氏の言葉を引用して紹介します。

「ほとんどの老練なコーチの間には、バスケットボールの技術的な知識において違いはあまりない。ビジネスの世界でも同様だ。管理職の立場にある者はみな、それぞれの仕事の基本を理解している。しかし、部下を教えて、やる気を起こさせる能力は、指導者によって大きな違いがある。知識だけでは理想的な結果を得るのに十分ではないのだ。部下にやる気を起こさせるという、つかみどころのない能力がなければならぬからだ。これが指導者の条件である。部下にやる気を起こさせることができないなら、人を導くことはできない」(『育てる技術』より)

コーチに必要なのは、「選手をその気にさせる」というつかみどころのない能力なのです。